



金葉和歌集

特別
A4
8099
5



14
8099
5



< 2001 - 017 >



一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

金葉和歌集卷第一

春

坂河院御時百首ありけり（百首ありけり）春はよき

修理大夫顯季（アキラキ）

うらめしき春はきふらり山川を思ふ（思ふ）春はよき

春宮大夫公實

春はらて梅よ来ぬとて春はよき（よき）花を思ふ

藤原顯仲別後

流るる水は春を思ふとて春はよき（よき）花を思ふ

皇太后院後



つれづれと春を思ふとて春はよき（よき）花を思ふ

百首ありけり（百首ありけり）春はよき

前納言内侍（ウヂノミ）

春はらて梅よ来ぬとて春はよき（よき）花を思ふ

早春はよき（よき）花を思ふ

春はらて梅よ来ぬとて春はよき（よき）花を思ふ

正月はよき（よき）花を思ふ

修理大夫顯季

あつ玉の年はよき（よき）花を思ふ

春宮大夫公實

物産ゆけくきの楮の指の君をまはつ花をいぬるん
實約の家れ奇合小籠をいよる

か将に教母

初もこれかきりる定のさうさうやき盤れ山善長初ん
藤念顯情初長

年よににおるぬおをまき籠すく此山のさるるを
あ乃のさよる 大宰大貳長實

棒り善長くきに成よるの山善長すあひく
百首歌中小寫りうあさる

修理大史郎季

うらむのさうさうまをまの妙きいの人善長をん
はあさるさうさうさうさうさう

春言大史公実

今より梅のさうさう寫りて思をりてさあめをん
じ月八日書たりさうさう寫りて思をりてさあめをん

春原顯情初長

今もさうさうさうさうさうさうさうさうさう
曉寫りてさうさうさうさうさうさう

源雅道初長

うらむのさうさうさうさうさうさうさうさう

皇后交よて人く方はくまうりきりに雨中驚と
よるよる

源俊賴朝臣

去西よりまじし事よも書り發たむぬゆも我ありたり
良選法師おれいもまきりるにた久并經頼
の家は梅乃さうりぬ笑らきれはよひの守にいさり
くくしてせういひの道徳なり

良選法師

じりももよるあそりふは後とて、せくををいせりきれ
梅花夜董し、ぬりてはぬりぬる

前大宰大貳長房

梅つえ小風吹ん雲の影行ぬ袖えふあいいぬれ
朱雀院よんくゆらて用庭梅花といぬりぬ
よる

大納言經信

空ふくしいふこはりせの梅のさひらや雲は風らほ
道雅の家の方合小梅花とよる

藤原為房朝臣

ちりがお新みゆきし梅もあはるはるは雲は風らほ
梅むとよる

源忠季

かきりあつて地りふゆも梅花さゆの楕ふのをせと
子月れんとよる

大中長公長朝臣

春日野の柳のいふ花招ひてそとに柳さしゆく人のいふ花

百首之中に子日のちかるとよあり

大納御進房

春霞たりのかきせしむいりし柳をよみかたよはぬは縁

柳系池風といふと紙よき世持まり

院御製

風よきは柳のいと花がしらふみひくよつやそとに花まよ

百首之中に柳とよあり

春宮大史公實

柳をよみ吹く風はゆきまじりてふらふらふらま柳の系

池原柳とよあり

源雅兼朝臣

風よきは花のいふ花とよあり池原よみいふとよあり

呼子鳥とよあり

前法院尾法

いふ山くね人のいふとよありいふとよありいふとよあり

鴉とよあり

春京成通朝臣

花をよみいふとよありいふとよありいふとよあり

おろしとよあり

藤原通朝臣

今とよありいふとよありいふとよありいふとよあり

花薫風といふとよあり

杉政大史

うらなふのちの栞や暗かぬぬりしつらにせむる春風
白川の花人の清幸よ

新院帝御歌

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

太政大臣

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

大宰大貳長実

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

待賢門院皇清

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

源雅基朝臣

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

院帝御歌

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

春宮大史公實

あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら
あはれなるもよそにさ宿めれむらさきいもつらふら

田大臣

まよひに書けみよのふらふれ風よまぬ花よ
た兵衛待實徳

こゝ春のつらふ白のつら花をくしりかき流木のつらよ
山寒花遅といふるまをよめる

ま京大史徳忠
山はつ木すぬれ風のまじし道むのさるふ成れよふ
花為春白なといふてはよめる

田大信
ちぬむ花よな中さぬ一まふむらのつらふ
新院の方めて花突進年といふるを

待賢門院中納言

白雲にけふ楊のつらふとくまのまよとえふつら
藤原頭信朝

よの代より花のつらふのめりしといふつら
純日菊花といふるをよめる

源貞亮朝臣

まよひに書けみよのふらふれ風よまぬ花よ
坂河院河村女房はら花山のむとせ母はつら
つらふかゝるつらふてはあやてつらつら
るよ女房よかゝるつらよまよせ新ら

坂河院御製

花光と雲の清く丸つる小庭の櫻やさうりあふん
源仲俊頼卿

空如く運ぬあはれもきてえん櫻花さうりあふん
源山花頼卿

太宰大貳長實

か片山うたふもよみさうりあふん
源山花頼卿

摂政大臣

花光と雲の清く丸つる小庭の櫻やさうりあふん

人く母あはれさうりあふん

修理大夫顯季

櫻と花光あはれさうりあふん

山花尚人頼卿

大中臣公長朝臣

さうりあふん

源山花頼卿

皇后宮御製

さうりあふん

源俊賴卿

空しく嘆きありしら久巽れを并よ是方海のうら系
遠見山花といふ方と似よあり

大冠卿 匡房

とろき山をのふむれ嘆きありしら川波をうらとえ方
藤原忠隆

う野山花をうらふ方白をうらふ方花の揚ありあり
城河院時女御殿女床とらあきくうて花火
ありきくは下よあり

新井文統前乳母

春こころぬ白いと楊むいり風のけりしうらん

人よかりてよあり 信正行尊

よ花をいりふさく花をねとけりてえんゆあり
後冷泉院時皇右女共合楊とよあり

城川右大臣

昔もあまてら移入山楊をうらるれ風りをゆく
月前見花といふと似よあり

大冠卿 匡房

月けは花をうらむれは風りしきとあり
歌よあまてらうらるのうら首人くよあり
あふよあり 大宰大貳長安

喜り日女のよきさきよふつ雲、風よそらと花ををる

水上落花といふ方こそよきなり

源雅憲の長

花のよき風やよきよつらん楊なれん川をる

落花漸盛といふ方こそよきなり

丸無清持實能

喜り道にまよふ風やなるとて庭に花の感あり

柳河院の付中交行方よ風用花香といふ

よきつらまき方 源俊賴の長

花よ、涙とをみそてはくつ花のゆを風よそらとあり

落花れをよき方 長實の母

喜りよにまよふ楊の花を道に行むるもかたしあり

落花随風といふ方こそよきなり

右善清持實能

うきまゝのまよふけつらまきの花とよふまきつせあり

水上落花といふ方こそよきなり

大細云經信

あましのまよふらん山川の井くいは作らむかたあり

右京成通朝臣

如月のまよふ地つらまきのよき時をけりて風よそらとあり

落花散衣千代といふるふと云ふあり

藤原永實

ちかかぶさしきい若れりしてむふ神のあまぬあかり
城川隈清時花のらうらうとなきあつらて地うさ
母のいづつまを新て中交のいづいそをまらむ
流の方とまはし人としてあよめをせしとあられ
こつらうとせしりきり 師画殿
梅花をうきまてかきしめくうとせしとあまみるれ
むろをよらうつらうとあてふあり

藤原院女千代有

庭ろくまをこし指し喚くせらつ流のまはらあけり人未

夜思落花といふるふと云ふあり

清原法印

衣のいづらばらり人梅とれまはらあけり人未
まののゆらけらふ山田はらうとあてふあり

高階經成朝臣

梅とく山田をいづらうとあてふあり
後冷泉院清時月あけりけり夜ゆ床にらとく
首殿よわら新すらきりふ庭の花うらりえ梅あり
るときらうとあてふあり

ふかき世にありて中交のついで下野を
あんなそらにいつらけしはつらつら
以後人ともあつむねりてさつねとあやせとありき
是はたれとぞいふとたれは母は侍くとむせ
ありやれははつらつら

下野

春のよの月れひるをうそりせを舟のむといはれ
新院（やせし）の方を残花薰風といふるを舟よ
ちりよぬ花のありはなとこれいひ風をさう（ま）

中細言雅定

奈良ゆくくく百首ありか人もりふさ願とよあり

権信正永録

山室は野人のさついでを舟行りのよもいれ
百首あり中ふかきつらとをよあり

修理大支頭季

東海のかほり浪のがもついでを舟にきても笑つらありか
善田とよあり 久細言純信
あつと田よはを言川とまき守とついでを舟にきて
苗代とよあり 津守圓基
野（野）のりや野のよ田越うらやけを舟にきてつらあり

有むとよあり

藤原顯輔朝臣

ひさしの色はゆかり小春の風は秋の松毛むすむす

房の有むとよあり

律師手増寛

ふゆ人たはたはる有む有のふゆとよあり

紫藤苑の有むとよあり

良暹法師

お名もあせせりせお春の風は秋の松毛むすむす

二條開自家ゆく地色有むとよあり

大納言經信

地よの雲のこい枝よは心の浪よりかお春の風は

百首うち中お有むとよあり

修理大進顯季

何のえは松よはる有むとよあり

西中藤花といふ有むとよあり

神祇伯躬仲

あまのうらなはる有むとよあり

隣家春花といふ有むとよあり

田大臣家越後

あまのうらなはる有むとよあり

金葉和歌集卷第二

夏

卯月一日更衣のあはれとよかり

源師賢朝臣

こしあはれいそあはれあはれ
二際冥白あはれとよかり
よよかり

藤原盛房

友山あはれあはれとよかり
應徳元年四月三糸内東中庭樹陰葉とよかり
こしあはれとよかり

院河部

とよかりとよかりあはれ
鳥羽殿あはれとよかり

喜文又文云

あはれとよかりとよかり
大御言経信

あはれとよかりとよかり
卯花連壻とよかり

大苑に直房

あはれとよかりとよかり

卯花とよあり

江竹信

雪もも油のしもそと清卯花のるまは月の影も

杉政丸大臣

うの花をさるぬ枝のいさしきしも若まらねるる武門

卯花雅瑤とよあり

中納言實行

神山志ゆれふふのうれをいささるさめゆひ枝のあは

卯花とよあり

大納言経信

志のあつち火きくを卯花の咲くはあはれ

杉政丸大臣とよあり

修理大史顯季

志のいささる雲を卯花のさるはあはれ

杉政丸大臣とよあり

友東節信

志のいささる雲を卯花のさるはあはれ

時鳥言十首人いささるを卯花のさるはあはれ

杉政丸大臣

志のいささる雲を卯花のさるはあはれ

源雅光

志のいささる雲を卯花のさるはあはれ

時名とすう稱きり日はきりて二百ありて
まきよあり 楊成光

郭とすいしはのりあてきてきり稱きり
長美の家号合ふ郭とすいあり

大京大史經志

年とすいきりははれ時名發ハありとぬそめを
時名と稱するを 内大臣

意とすいなる者やそ人郭とすい稱ぬ
郭とすいあり 藤原頭補朝臣

かきり寸分たえいありて
かきり寸分たえいありて

水曆二年内東方合ふ郭とすいよか
友直者善

時名ありはれぬ称ふるを称なるを
郭とすいあり 持僧正永縁

きりしはよりしははれぬ称なるを
人十首方一人のりありて

源俊賴朝臣

約してしははれぬ称なるを
郭と稱するありて

中絶言實行

郭云一と云ふてぬお建いあやめく妻うらやみなる
月お郭云といふ事なよある

皇右文式部

知なきはかの事いふにあり月お郭のあも御つら
お國郭云といふはよある

源定信

と云ふふお坂の所いふはあも事いふ事なよある也
お時なるといふ事なよある

鏡入一らす

お時なるといふ事なよある也とまづいふ事なよある

雨申郭云といふ事なよある

大納言経信

お時なるといふ事なよある也とまづいふ事なよある
お月お郭のいふ事なよある

内大臣

あやめ事いふ事なよあることぬおはよあかたと思ふ
永兼中殿上振合小あやめとよある

大納言経信

お代よかたぬあひなりぬ事なよあるあやめたら事な
郁芳門院振合よあやめとよある

在原孝善

あやち草いしてまだゆきなるは初めいそあさうは治み生
水暦二年同裏方合よ萬浦とよめる

春宮大丈の實

むいもさうのあやちと引つらんかひ宿つさうとあかひ
文つらんさうのむいもさうのりくは月昔よとむつらん
とよとて
拾信正永緑母

あやち草わがれは引そてたんくあぬよわい毛生
百首うちの中いあやちをよめる

春宮大丈の實

あやち草いしてまだゆきなるは初めいそあさうは治み生

九月八日あやちをよめる

左近衛府生奉意久

あやち草いしてまだゆきなるは初めいそあさうは治み生
ひの中流よすませ行きり初めみえさうらうあやちと
人の中流のしとくをよめるよませ行きり

三宮

あやち草いしてまだゆきなるは初めいそあさうは治み生
百首うちの中い九月をよめる

泰議師

杉政左大臣家光より鳥をよめる

源雅文

春もどろくはつあきたる水鶴のそらよりあはれみ

實行の家守合よ夏風とよめる

隆理大臣顯香

衣下をよみ兼て吹風よむいそあんとを唐やなくん

水風吹涼といふ事なよめる

源俊賴別后

風事日向守りたる紫いぶきとて涼しく吹ぬ映蟬のそ

照射の心とよめる 源仲正

源あよみたる此秋のうきもつと如くさうとを兼てよめる

仲祇伯顯仲

兼てぬとさうすえにいさりてつく秋いふは秋のそら

家守の合よむ風ころもつとよめる

中納言俊忠

さ月も花にらとまれありつと風つてあそをいそひ

百首歌中小も橋の心をよめる

春宮大臣公実

宿にいとあたらむを白いそいそあつ事と風はつと

二條宮白家より雨後野草といふ事なよめる

源後頼朝

こゝろをたたりたつらりやとらふゆゑのとうぬき城を
美形の家を合よ鶴川のうらと

中細言雅定

大井のくぬうよひれとめんやうふたりぬかりの歌

夏月とよあり 源親房

むらもゆとる人の雲るらりてまのあつなれ月

六月十日より秋の長よけりきり日人のうらつと

一うらり 杉政元大臣

又五月のては日新の所りやう風のそけうをうらりか

と實のあめく新水給月といふ事なよあり

藤原基俊

夏より月を雅れますこゝろは定りのとめいふむら

秋隔一日といふとほ

中細言顯隆

みそをうけは風のすくまひと東とこりて

秋やまへん

金葉和歌集卷第三

秋

百首うち中小結しるしとあり

春宮大夫の實

こころに吹たくれの風を道と知しる日と海に花

野草帯露といふるこころあり

大宰大貳長実

高けしあはれ御座のきこゑと吹みたる秋の風

後冷泉院の時皇太后文芸秋の合しとあり

古丸内侍

よる代よきえりつらとて夕れひめしのを城をりしあり

夕れれとあり

徳田法師

夕れ昔の衣といふと流る人あはれく小舟をさす

七月七日の帳とてゆけりあり

橘え任

衣をいそやするとて夕にかこぬまつくわくをさす

夕れれとあり

前秋文河内

悉くておひとらわ夕れの抱り花をほりしあり

三宮

夕れは花よじひれあられかゝるの舟はらとあり

中納言四信

七夕あかせるさるを此露なきにあつぬ字色と見えお
七夕後朝のさるさよあり

内大臣

かきうらあをてわらふ時を七夕かきうらあをさるる

皇后宮権左大臣時

七夕あつぬさるの涙もや花のかつても露あらんらん

内大臣兼左大臣

天川るるさるよ波ひよありさるるさるるさるる

源俊賴右大臣

あつぬはあをさるさるさるさるさるさるさるは

草花若林といふさるさるさる

源雅兼朝臣

咲えひらあつぬさる女高花若とさるさるさるさる

あつぬさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

物秋さるさるさる山家秋来といふ事さるさる

大納言經信

さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

田家子秋といふさる事さるさる

右無清齋伴通

いふ葉く風の葉をぬ霜のいふあつてけり秋と云り
山家初秋といふりよけよあり

藤原行盛

山あふ人ものさそ霜をきこし和東の山好いそ
仲賢初秋の梅津の山をいんぬらて田家秋
風といふ事よあり 大納言仲信

冬は山田のいふことありのよありよねをそ吹
音月秋といふあり 大江元資初秋

山あふあつてけりあつて月秋といふありよなむと云ん

抄政た人信家あて夕月秋のよとよませゆらにいよ

あり 有京志隆

風まは枝をさうぬ木ありあつて秋の夕月秋なる

月振霜友といふありと云んあり

法橋忠幹

葉花の葉のあそさけりあつて月あつてあつてあつて

閑見月といふ事よあり

顯仲口女

もろもろあつてあつてあつてあつてあつてあつて
秋の月といふありと云んあり

お中池云伴房

江戸の小成をとおす月影をこゝろに海より人おはすは
多相殿めく極宿月といふと成よあり

春宮大史公實

我をばあし世に極子まおおれありを全る月を
寛治八年八月十二日教多相殿中池池上月といふ
と成よもせ妙きあり

院師 胤

池ありまよしの月とてうてたえめくいにさるるのこころ

大納言 經信

てる月の志はあふおと決むりか教をいふとさるる

教の月といふよりさるるあり

氏部 忠教

江戸をとおす月のとてあふおと決むりか教をいふとさるる

後冷皇^泉院^泉時皇^泉石^泉交^泉命^泉よ約^泉達^泉の志とあり

藤原 隆経 朝臣

いふ約の教より外にみえつる実の志水のこころをさるる

かろい^泉と

あつらふをとおす月のとてあふおと決むりか教をいふとさるる

八月十五夜ありとあり

源親房

あつたひのうららかに月影をさしよむるぬふとほく
同月^カあつたひの八月十五夜とよあり

春宮又実

ねむる月のうららかに年あはれよむる月影の若くは
水と月とよあり 前秋又実

雲はかたからぬと秋の月影と清洲川ようつとを
八月十五夜あつたひをよあり

源俊賴の臣

すえのふらぬとよむる雲のうらぬねねよあり月

月をよあり

皇太后肥後

月をよむる雲のうらむる雲のうらむる雲のうらむる
人のよむる雲のうらむる雲のうらむる雲のうらむる

源師俊朝臣

いふてとよむる雲のうらむる雲のうらむる雲のうらむる
雲のうらむる雲のうらむる雲のうらむる雲のうらむる

又信

あつたひのうららかに月影をさしよむるぬふとほく
兼暦二年同裏方合小月をよあり

春宮又実

くまのあはれ新とてあつたのよき月をばりし

宇治前を改て信家命合よ月とあり

皇太后を移津

工部月のはらあゆむ富のねの好の水を抄かきさら

源信賴朝臣

あつたにそらあそびとぬき替へひらり元月此三のあられ

水上月 移改元大臣

あし移るひのこもあつた治あよさらあつたあつた

宇治前を改て信家命合よ月とあり

一宮紀伴

か見山よりうらひはつ月あられをそらあつたあつた

秋のあつたあつたはつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

秋月あつたあつたあつたあつたあつたあつた

源信賴朝臣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

秋明月といふあつたあつたあつたあつたあつた

源行宗朝臣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

八月十五夜人々あはれむきりによあり

平仲季

みづの山をとりて山よりくるとあけぬ秋の暮る月

宇治前太政大臣家三千條の合小月とよあり

後人不知

屋敷の月を光を留まりけりよのそりあすめり

月をよあり 友東忠澄

舟の道に交ゆきまにをりてを毛たふすあつ月

舟の北の林後合小月とよあり

拾僧正永録

いづれも秋をいらいのいづれもあつ月

月をよあり 藤原顯輔朝臣

いづれもあつ月をよきれは秋のあつ月をよきれ

太皇太后交扇合小月をよあり

かすの山をとりてはつ月をよきれは秋のあつ月

かすの山をとりてはつ月をよきれは秋のあつ月

秋のあつ月をよきれは秋のあつ月

秋のあつ月をよきれは秋のあつ月

秋のあつ月をよきれは秋のあつ月

後朝朝臣

しんぎや月を海よりみればたれゆまに照らす

月のまよふあり 藤原政経朝臣

海よりみちる方あり月影のゆへもあはれみ

月照古橋のしる事なよませ針けり

三文

こぼるる金かよとねあはれ月けりを泣かす

水上月とよあり 藤原實光朝臣

月影のさす心まをせし月毎の心まをせし

題しらす 冬宰久武長實

あはれみよ海よりみればたれゆまに照らす

永義か子殿とあ合よ月うをなよあり

藤原家持朝臣

あはれみよ海よりみればたれゆまに照らす

月前後宿といふことばよあり

修理大史顯季

あはれみよ海よりみればたれゆまに照らす

獨身月といふことばよあり

藤原有教母

あはれみよ海よりみればたれゆまに照らす

新詠曉川といふ事なよあり

持信正水縁

もろ昔ふしのとよきしにまぬの月をよむとてはらふる

土御門右大臣

ありけり月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる
山家暎月をよむる

中細言右衛門

山家暎の月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる
月のありけり月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる
すまにけり人く月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる

平忠盛朝臣

ありけり月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる
月前夜葉とてはらふるの月をよむとてはらふる

源俊朝朝臣

嵐や葉のり此神をたつとてはらふるの月をよむとてはらふる
あつとてはらふるの月をよむとてはらふる

前夜夜六降

あつとてはらふるの月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる
あつとてはらふるの月をよむとてはらふる

顯仲の女

あつとてはらふるの月をよむとてはらふるの月をよむとてはらふる

題不知

友人云々

玉花... 宿... 春宮... 實

春宮... 實

鹿... 進

暎... 麻... 山風...

白... 作

夜... 事... 月...

夜... 事...

内... 後

秋... 旅宿... 事...

源雅光

何... 旅... 物...

百... 中...

有... 胡...

世... 野... 露...

皇太后文妃後

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり
大皇太后文廟合よ人あがりて頼とよあり

信正行尊

二若う白ふ所りいさ家も色くあれん
藤とよあり 大宰大貳長実

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

女御とよあり 隆源法師

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

顯隆卿家方合よ女御とよあり

申細言後志

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

女御とよあり 藤原顯博御后

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

柘政大后

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

柘政大后家方合よ南とよあり

源忠季

あつ病とく人たふも那とれとく祝とに交れり

南とよあり 大皇太后文廟合よ

字のよき者なくひきりては葉の風も
お葉をよめる 秋祇伯顯件

幾ふ方たの葉やらの海とぬる風をた
大井道遠より水と紅葉とつる事をよめる

藤原伊家

秋の空よとかがい鴨とりをよめる葉の
落葉埋橋といつるをよめる

修理大夫顯季

そつ山をたあそむ吹うに音のけり葉の
落葉飛ふるとつる事をよめる

大中臣公長朝臣

おの秋のちの葉にいろをたつては海
落葉随風といつるをよめる

大宰大貳長實母

文曲を源山とれつりちをたつては海
九月盡すといつるをよめる

中京院則

あすらの海をたつては海
源後頼朝臣

葉の葉よけりといつるをよめる

九月慈惠日大井よ海らてふあり

春宮大吏云實

行ちと色より此の葉に比りてとてさしせえ秋の

こころをあらけり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

金葉和歌集卷第九

冬

兼曆二年のあまの殿にれとのこも越とさうてさ

はさうまうらうらうに所毎をとりてつうとさしりきり

源仲賢刻後

神宮のまじりまきにとくさしあてらるり紅葉ににら

は二位有系親の御草子合に時雨とよまら

修理大吏顯季

時毎にかつちるにれお葉といふお妙くよれお花みらん

なまむく人へ百首よちりまらるるれおあ

権僧正永保

山川のあはれはて時毎にいそみりるをたぬくありあり
時毎とあり

行政家冬河

祇園月と花の由れ方と色くしけりすかゝるる
後朱雀院時山前山霧苑紅葉といふありと
とあり

中納言資仲

紅葉らう山の秋香とせよのそとありは流とえり
大井はまよりとて紅葉とあり

平政親

おが井川をみりしとわらうとくたふ小錦といふは重

落葉をよあり

大納言維信

尺壁の山紅葉らうは娘の意落れと道ふり来り
竹風如雨といふありとあり

中納言基長

おし折ろとておえ神をる来ぬるお逢おめえ風とあり
十月十日はり麻の鳴き方をきくあり

法平光清

おふとに秋とてありとありとありとありとありとあり
百首の中にお葉をよあり

源俊朝の信

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

大細云 燈信

水満池上...
水満池上...
水満池上...

深山霞とよあり 大花の匠房

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

大中は長巻

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

水頼 頼の長

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

橋上初雪とよあり

前次院尾張

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

初雪とよあり 大納言

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

雪中鷹狩とよあり

源道 湊

冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...
冬も... 水満池上...

新^唐りりやとよあり

源俊賴朝臣

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

田大後家継後

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

百首歌中母君のうらとよあり

大蔵御医房

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

宇治前太政大臣家言合小君のうらとよあり

皇右大臣右津

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

中御女

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

大嘗會主基方備中国杯高山とよあり

藤原朝臣

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

源俊賴朝臣

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

くはらをさるふ源朝臣の我身をもふさるる朝

大後右大臣

物と此後うけよむを服く尺中と毛のそと通ぬる

炭竈とよめる

皇后文極大支師時

すたかじいん候ととの山い君けの乞とみゆりあり

百首うち中母君をよめる

滝源法師

都ふふ寄うり寄いんをきれと木の松山あそをた

皇后文肥後

道あつて移る君にたてて在るいぬきひりかたん

選子同親王いしんいにおとけり時君ゆりこりきり

小月うあうりいりかたよりそりきりかた女麻たり祿

毎りきりあ月も尺をくれぬよのみとに結ひ

つけきり奇

藤原兼原朝臣

かきくり西う東とやうりあ人月と君とはいひ可ゆり

冬月とよめる

源雅光

あうらら君降つてはさきひらけて毛はけりあ人

家持の後のあつてあうららとれきりいりあはれ

あうららとよめる

康資王母

はう木葉やたらまふ袖のよい風巾着ひらぬ新あはれ

秋ふれあともあつ

皇后宮極大支師時

秋葉あはじりの山あそあはゆりていぬ木葉あはれ

少とらむ世新きり 三宮

しるべきことなる積をゆりたむ私むとふ世のどけぬま
あまるとらむ 前法院六條

中くに頼りしときをがよてやとりの毛衣はたうん

池水とらむ お秋文同作

深きくふふたのよけりせん世はすくく池のどけり

題しつ 隆聖大吏顯季

と延よたひいれし世は深のふふとゆり頼の習はひらね

依花約春とらむとらむとらむ

内大臣

そふとく年のくはるけ行まねを新のゆりせきとらむ

歳暮のうらとらむとらむ

藤原成通朝臣

人言は言ゆきとけしむふ言といふ若れらぬとらむ

杉原大信家とらむとらむとらむとらむとらむ

印り小歳言とらむとらむとらむ

長一 藤原永實朝臣

かきまははつすくはれあひあまはせとけし行は年暮り

ころろとらむて年れらぬあはれとらむとらむ

歳暮のうらとらむとらむとらむ

三交

八母... 中原長國

中細言國信

たふ... 邦

金葉和歌集卷第五

賀

長治二年三月又日裏みく竹不汲色といふ

...

坂河院御歌

郁芳... 小祝...

六條右大臣

坂河院... 中宮... 松契...

とよませねまら

坂河院御歌

池ありうらまは白鳥とれ方と色ありて垂乃雲まて
大嘗會を基公方辰日祭入音於鼓山とよあり

春魚の威

表たきいし乃山れらとてそらうとて成れは
悠紀方朝日御とよあり

藤原敦光朝臣

くまをさるこよあらしわはまなる物日れ雲にひりう
已日槩破よ雄琴心とよあり

松風乃とこしれし小がうらそにさまゆりせは鼓山とよあり

後冷泉院御時大嘗會を基公方律中四言御

とよあり

春原歌の臣

乃の物とこゆよらとがすはぶまの雲人教のひは
たう國のいさ井といふ雨を人よかそらとよあり

高潜明頼

あしあまをいさ井ふまをら民やとけりうさう世か
秋意心とよあり 皇衣言水後

流しめ風くさるにら雲れ教えあまぬあつ雲か
花契遊子といふるてはとよあり

大宰大貳長實

礼をこれあつちとせよまつなまはしむるはか
杉政大臣中将あつくゆりゆり春日系使と下
守りよ同防内女使とてそりゆきりふ為澄々
仍事并あゆけりいつりけり

因防内侍

いほり礼をうけりしむき山三葉の松りあけけり
題しす 藤原道隆

志代あつちの世うかきりゆきゆりゆき
宇治あつち大臣家守合ふ秋のむとせり

中納言通後

志代あつちの世うかきりゆきゆりゆき

大納言通房

志代あつちの世うかきりゆきゆりゆき
新改水向ゆてあつち久白とつり事とよあり

大史典侍

志代あつちの世うかきりゆきゆりゆき
秋のむとせり 源忠季

志代あつちの世うかきりゆきゆりゆき
美和のあつち合ふ秋のむとせり

藤原為忠

又いつれいしうへるも代あさる種や宛にさる
前中宮はいめて由いさほきりに書りての
けいしうに降ち大臣のまじいつりきり

宇治お太政大臣

君はりの年ろちうしにさくくらせり松の花咲よさうけ

やう

六降ち大臣

つとむり君はりのちるる代に松のむゆくあな方
又書り年皇衣文う合小紙きんさうなるよ
ませたまひいりり

後冷泉院御製

片らほりま砂のねもあふなるはつとせきとちのち
松と雪といふちりこもほよあり

源頼家御作

うらむせのたよりとみゆか松のうよ書りつとる年も
前跡らる伴舞よあう甲もろはつとありの
る合といふもほせと現かほりり中紙きんさ
とよあり

源信頼御作

くそりあこいよらおりの朝日よ、あよほい人
百代まてふ

金葉和歌集卷第六

列

急房朝臣丹後小守りてそりけりつらき

大細言經長

あや花のやこれむとまきかきあはれおそくよ

也一 藤原急房朝臣

よれおまきく苗代あはれおそりつらき

重手陣よかりて下けつらき人々餓ひつらき

これしつらき 坂河右大臣

かきつらき極のよれとまきかきあはれおそりつらき

都々次

よれ人々つらき

よれおそりつらき苗代あはれおそりつらき

神宿つらき人々おそりつらき

みりつらき上東門院よれおそりつらき

前々奉入式長房

かきつらき神よれおそりつらき

これおそりつらき

上東門院

別らつらきつらき思ふ人々つらき

深きつらき大隅おそりつらき

心よりいふ人守りては、
御手紙に、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、

中細言通條

いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、

春宮大夫云実

いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、

楊則光朝臣

いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、

金葉和歌集卷第七

戀上

五月みづけしめらる女れをこころりきり

小一條院

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

女らつらきり

大江山實朝臣

その病うきしきくゆふれいと海せふをいそめん

曉恋とよあり

神祇伯頭仲

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

女らつらきり

春宮大夫ら實

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

頭承あやまかほ恋りよむし人の

右京右衛門尉

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

女らつらきり

源雅光

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

二位右京親子弟子合よ恋りよむし人の

宣源法師

あふりし袖のこぼれてあやまかほ恋りよむし人の

寄言多感して方て候よあり

左巻清書実徳

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

詠言多感

中絶言頭澄

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

中絶後家
たのめてあはれ感のころとあり

源頭回朔後

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

忠告此言とあり 中絶言實行

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

新月
月あはれといふ方とあり

藤原基光

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

詠言多感

よもいふはなほ

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

物りきりふのまじく 中絶にやうり中絶に若抄とあり

ひて月あはれといふ方とあり

左巻新書朔後

あはれなき事なほなほよもいふはなほなほつゝとていふあり

とける事ありとあり

つづらけり 春永有翁母

春之芳とはすまじもかかまてこころをなほ行れ
長生の家方合よ恋のさくらよもあはれ

藤永忠隆

春のあはれは涙の雨れさけし恋のさくらを毛母とつる水
人とうりてはくさくさ

藤原惟親

春風よ志をなほ海の方よりさうさくも程幸のさくらに
なれ若たのさうさくもあはれ

前秋文内約

あさきやちきもさくぬ若らほまはるは恋のさくらよもあはれ
逢不遇恋のさくらよもあはれ

大京大史記志

いと春ははらう葉ははらけのちり積るとはなほいなり
後志の家ゆく恋のさくら十首よあはれ
こころは人よかたてよあはれ

白鳥右馬式部

あはれもはらけのちり積るとはなほいなり
実行の家方合よ恋のさくらよもあはれ

藤原頼朝

い流しゆく恋よらうりて我もらそふあそと此観をらん
恋あそよあつ

のら世と笑一人をのれぬとささやとのいぬらん
杉政丸大臣

いぬとさといぬあし福とさひさなれ無と今も
かこいさうくのあさしにちりてうさしとられ
とつらうさう

約一はさきとさあさしとらんといとてさす
あつた人くく人さうりにうあつ

律師實源

衆とかけく衆中あしとあかたあつらりてこれ

皇后文義徳

かき捨てれもあつらとらうあつらとささあかた
極宿恋のさうらとよあつら

杉政丸大臣

みをもあさあとい福の弟抱玉のさかた孫れんを
坂川院河村執事合ふよあつら

皇后文義徳

おしあつらとい福のさかたあつらとらとら袖の葉と
皇后文義徳人くく恋あつらとらとらさうら

被田文恋といふ方より伝へたり

美濃

ふききともしのふらふらぬまはじとくぬらうつむの
人くぬ恋のふらふらぬまはじとくぬらうつむの

杉政太大臣

らゆらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの
恋恋のふら

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの
二日月のふらふらぬまはじとくぬらうつむの

藤原為忠

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの

三宮大進

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの
ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの

杉政太大臣

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの
百首の中い恋のふらふらぬまはじとくぬらうつむの

修理右大臣

ふのふらうつむのふらふらぬまはじとくぬらうつむの

杉政左大臣のくゝ恋の心をよめる

源雅光

あやめにさかればしほもあはれといふあはれなれば
寄山恋といふ事をもあはれ

大中臣公長卿臣

春のあけのつゆはあはれといふあはれなれば
つゆあはれといふ事をもあはれ

藤原公敏

うさねあはれといふあはれなれば
後志のあはれなれば

不苗恋といふ事をもあはれ

源俊賴卿臣

なほあはれなればしほもあはれといふあはれなれば
女といふ事をもあはれ

春之文大文の實

あはれなればしほもあはれといふあはれなれば
重なるあはれなればしほもあはれといふあはれなれば
身のあはれなればしほもあはれといふあはれなれば

橘後宗女

あはれなればしほもあはれといふあはれなれば

恋のうらを人母かゝりて

前歌言上結

石の海流の水とて流しつゝ恋のうらを

題の歌

皇太后列南

たのめとくこゝれ葉のあもされば物をなましくねる

露のしらべ

金葉和歌集卷第八

戀下

初恋の心とよまり 良暹法師

かすめては恋をうつろをさるやとて恋は元はまをせむか
ふはるあめく金葉わたり稿^ま迄^まの歌と人くあき
ませきりにいとそくゆりて人く見あふまゝの恋
かたりあられはまのうらをひらきよとあ

藤原範永の詠

恋のうらよまをこゝや松の葉をまゝに金葉のうらあはれとて
後刻恋のうらをこゝとあはれ

源師俊朝臣

志はちあけゆく定もつらきに波よみ海もあそむる
月増えといふるてはしる

田大后

いそぐたも新世のこころいそ月をみてもちまはる
志はちあそむる 存京顯情朝臣

無事して福ぬれつるれは志はちあそむる
鳥羽殿方合よ志の心とよあ

藤原仲実朝臣

いそぐたも新世のこころいそ月をみてもちまはる
志はちあそむる 存京顯情朝臣

中細玄雅定

あそむるたも新世のこころいそ月をみてもちまはる
志の心とよあ

大宰大貳長實

あそむるたも新世のこころいそ月をみてもちまはる
志の心とよあ

持信正永録

あそむるたも新世のこころいそ月をみてもちまはる
志の心とよあ

持信正永録

思ふにただのう一人の若にもあらずなればうらやま
恋のぞとよあり 隆源法師

くねくねとわらわの心せふ事とてさういふ事して恋は
休家時くましく一歳中をうらやまといふ事

お申交我後

今さらあそびあはれ神をいふかゆさうらやまは
恋のぞとよあり 後述の家やう

修理大史郎季

こねえこり登られたるきり夏衣をうらやまは
かすいさう人の我とはうましくよきなりておと人の

おと人の心とてつらう

一人とて

あそびあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
都芳門院の根合ふ恋のぞとよあり

因防回約

恋ひてなむらえはうらやまはあはれあはれあはれ
人とうらやまはあはれあはれあはれあはれ

前浜交河回

わらわはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
恋のぞとよあり 本筆大貳長實

はらまはしむのあつとむけの秋よあり

持信正永保

まづ人のとをえむる月ありおろくたけしふ新のまは

言水鳥越 杉政左大臣

あし事もたこにああころり鴨はうき秘とまこと合

人と恨てよあり 右京盛持の臣

このやいころあはうきにけうとそくあつとまこと合

杉政左大臣あめく無のむとよあり

保雅文

名ふそころりよそは海の海さしを方よはる地と

うらうまのあつとむけの昔とむいあつ事あり

て お秋宮甲斐

ふんあつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

あつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

そらもろくも事ふつとむけのあつとむけ

橋後宗女

あつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

あつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

あつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

あつとむけのあつとむけのあつとむけのあつとむけ

ト云れし

中原章純

恋より方志にあきてぬふれ紫をのりてはせう格なり
伴賀が指の毛をこいつらうてやう

前帥師資 資仲一

口方乃海うりくまふあされもあやしくぬきうくふ

也

伴賀が指

たまきうに海のさうらう清くおふのさうれいひつあうを
物なげいさう清月のあうらうとけう乗あうさう一侍
つ縁らりぬきうくまふあ

楊俊宗女

つ運くとたないそらう一人とあそてり月あうさういん

題不知

上総侍臣

あさましく海ようふ我身うをわらくおんをばさうい
物まうらうとけうさうらやうたまのあいさうらけい
とせゆのし上東の院よゆりすのわととあ
りといひきうくまふあ

原縁法師

あましくわがほそをうけうをぬいふそはあうた
恋より方志にあきてぬふれ紫をのりてはせう格なり
民部卿忠敏
無きしてきうあうの娘やじうていあは雲たうん

女札うつらき 大細言経信

あきとせしともなるそはれ我らぬ糸よ奉をよわ
人のそとめく女房なるは賢とらりそとを

まはらあり 藤原顕徳の信

人重の御ふをとかるなむくはくそむてなぬと
坂河院御時整書合よらあり

中納言信忠

人重の御ふをとかるなむくはくそむてなぬと

や 一言紀伊

そとせしともなるそはれ我らぬ糸よ奉をよわ

書むかき次とたのそらけり人札日日月

いしりまてみえそらけり

杉政家城川

契とけ人もこすとの本れらなるあ月の新

とらわらりころ人あもへりけり

い竹信

わらまよかたむくを後河なるまはる

因信の家文合ふ初意のころとあり

源兼昌

そとせしともなるそはれ我らぬ糸よ奉をよわ

あつちうるあつちうるたのこつちうるつちうるあつちうるあつちうる
人々のあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

皇后宮少侍

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

修理大夫顯季

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

一文紀伴

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

友原永實

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

源信宗約

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

左京大夫能忠

あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる
あつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうるあつちうる

金葉和歌集卷第九

雑上

ひー道方みちかたふくしてはくじいふりて安樂寺あんらくじ

とらして尺ゆりはかりを梅うめのころ任まかしりくまふ木乃

すまが形かたちしほさしほさくさく花はなを木きあてあてこころくく嘆なげこ

ふとふとかかててよよあり 大納言おほののり經信つねのぶ

津垣つゝかき中なかつししつつふふ梅うめををままにに志こころ木きととなるなるににききりりか

山家やまけ寫なししるるるるととははよよあり

杉政すぎのりたたるる臣おみ

心こころももううれれ各おの中なかししととささままのの心こころささららくくいいとと喜よろこぶぶののこころろをを

圓宗寺えんしゅうじのの花はなをを西にし院いんとと後ご三さん條じょう院いん此こゝのの事ことをを歌うた

ししととよよまませせ行ゆくく

三宮さんみやう

拙せつとと評ひやうををなながが花はなををいい逢あははるるををななむむわわがが花はなををいい逢あははるる

花はなををいい逢あははるるととみみくくいいままううここのの内うち約やくののりりつつつつききり

権信ごんのぶ正ただ永なが保たも保たも

ゆゆめめたたちちふふくくふふととここををいい逢あははるるととせせうう人ひとののかかららん

加藤かとう 内侍うちわらひ

いいととせせううままよよととんんつつををああてて切きりりとと花はなををいい逢あははるる

大守おほのりめめくくああららいいけけぬぬ様さまををととみみくくよよあり

信正の書

花をよみおとれとて人山梅花らりつふとるふり
坂河院淨時殿上人おまゝにうて花人にまらき
る中仁和寺に新宗の信ありとてあててすむい
あつと信のまれつうはなをうまひてけりてけり中かきつける

源新宗の信

いとせいにしれちりぬんもろ人の花をよみとてまら
山雲ふくゆらて花のうらけけりふり

源定信

人ぬらりけり山梅とれやうらぬ男とて花のよみ

後三條院之れがうらまて又もとて花のよみ

花をよみとて た近府生泰意方

花のよみにあをかきけり花のよみとておのよみ
はなをよみとて花のよみとて花のよみとて

源重頼の仲期信

年事とてまにまに花のよみとて花のよみとて
花人たりて信時家の信にりゆら小右中弁伴家
りともつりつり 藤原権信の信
山吹をたけりかきけり花のよみとて花のよみとて
花のよみとて花のよみとて花のよみとて

とらそらけらぶれをいふの枝の葉よとて
神のまはりのまはるといふ

神主大膳民忠

深心大念庵まにちりておらよとらふおとらけ
可あくあよとらふおとらけ

良暹法師

きよてがよとらけをいふとらふおとらけ
有京基清の死人あくがうり新てわらふおとらけ
又り日はうりまら 藤原家總
なほおとらけはあくがうりまら

一おまたま寺にまらせけと日ころ念仏を
まらにまらまら人く作書ふまらりてあくがうり
あくがうり 源俊頼の孫
くつるり花咲ぬんはらの松を祓代のもれとらけ
田家光朝といふまらとらけ

中納言基長

ゆとあ山田の唐お老まらりまらとらけ
仁和にすまをけりまらりまらとらけ
とたりまらまらとらけ

三交

かすの山麓ついでに月影よもよぬ音も松毛ありきり
信都頼基文の山小あそりぬとてきつてつらきり

楊徳元

うやまういせとていけりし海が山嶺の月とて

信都頼基

そあふ酒の心ゆく月影のまるにきとたつ後

都芳門院伊織よけし海もきり出あつて山に

そるをけりし松麻川とてわりのきりふよあり

六條右大臣山方

とるるたつやありすつらきとてあつたきり

源仲らつていふあふもふとてつらきと

ひくときをせゆきひをたつてはつとてあつ

つらきとてあつたきり

杉津

つらきとてあつたきり

美濃

うれと毛秋のえん松風まういふとつらき

月あつたきり

田久保家越後

つらきとてあつたきり

かゝるさいしらのあはれよめこりたりきりな事おこり
ら〜らり

お祓言因の

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
和泉式部保昌にらうして丹後お約きう都よ宮
約りやうふ小町う田約ちう丸にこゝろしてさうり
うらひ定頼つたあはれよめこりな事おこりなせ
お祓言因のあはれよめこりな事おこりなせ
いふせりこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
いふせりこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

小式部因の

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

平康貞

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

娘

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

暁理大夫顯香

お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ
お祈りこゝろして志りおこがなを新しり念こつたあはれ

糸織師権カネオリ

こ糸中にあひくし船一から行くのあさうろには糸の
あう集撰一約きり寸ちあはれてとくろとてよまう

坂東形物語

家の風ぬね物ゆふうこれそらのうしろ紫らじとてあ
和泉式部石上ひさかたうきうにわづ津よまらうと
あまのうきまけしむに人のきこひれあまのうきと
あうやうを尋ねれと下命をうきうけゆるあり
ひさきしよまう 和泉式部

藤原方相系いふさほく死念つけとて所こりあを

坂東のまいぬえうらまののきこふまうをけりけらぬ
とらうけりなれしてあまのまをれらもろ小まうと
いふまをいよひぬれあうつとぬまをせよまう
こらにうあうまうとすのけりなれは時房はう
てゆりてぬまゆまきとてなまうとてこれ鏡の
あうまをくまをといつらうまきれはけりいしよ
つけいりまう 藤原時原

梓弓の我はならぬまうらあけりなぬぬぬぬぬぬぬぬ
にまにかましくふならて程とくぬひよ長てぬらぬ
ぬまへくぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

からりともあり

春交々美ら矣

千代岩あそふつゝとてはさしきくう長くまじしあ方とてさ
大貳首通とれして地中けを程とく山をまじ人
乃中れはよあり 相模

ふまへ山田いさふまきばあまも此程もくれは程あり
肥後内侍がといひてすまじておけくとも物んとて海
せ行あり 坂河院淨教

つとて程てちけく袂と方かふふまきあめ神のまじりあり
宇治よとく水車をよあり

僧正初号

とやこ漸くまきあめらりてあ車田里もくは毎よとつとて
まきあめあまありてつとていさくは上東門院は村と
まきあめ人よとてすてまつとあり

坂河右大臣

はくはくこれあ程とあまきくはあこれ木十とあまは
いさく 上東門院

すれはつる月日れもまきあめつとてあまを方とあこれあ
僧正初号まきあめとまきあめつとてあまを方とあこれあ
つとてあまを方とあこれあまを方とあこれあ

大徳云宗通

お記ふふとふたてつらうらやま

源光繼女

日ひおのき者ならんともむとみさくさくならんれ
源作のよくとてはくにいさるるさるる源は肥後守
盛房ならのあつんむじとせよとせむらふれ
いりおとれらうとそらけむいそらうにやたを
けむてしう

源俊頼朝臣

お記ふふが事なほならんをある物とむははれおふと
お事なほ神代といふ事なほく久しう物なほ朝臣
ともお記ふふのありてまらけむいそらうにやたを

信正朝臣

乃人ひら我方おそねもとれぬものいふら
そらぬ人のそらがくしてきけりおふとくたては
つむしうらうとら梅をとせそらけむいそらう

積人

系これほけんらとみし程をあるこはう力ひら成より
城河院御時中よ女床よりと亮仲美紀作よ
てゆるり時和方のうらんとむとせしむしあま
海らのあまよとくしてはくうら

前中宮甲斐

人あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
保美のやうにうしろくはりのをころりしほよ
見ゆかかんとせむけりうらまはれりてゆかり
ときりていそなり

友原實信母

あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
月うらまはれりていそなり

源仲賢の母

あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
楊梅長の母 隆興の母 隆興の母 隆興の母

友原實信母

あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
とくやうにぬきけりていそなり

藤原實光の母

あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
屏風絵よきうすうのやうにゆきかきぬかひり
可なり

藤原朝長母

あはれをうらまはらりていそとぬきけり見ゆ
読人あはれなり

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

てゆりちりのしりともかくてよあ

いけりあもきり物をあふまきしとくあひりこひひかりか

大東の初蓮聖人のまゝ小神つははとよあ

天台座主仁寛

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

百首の中ふむ懐のうらとよあ

源俊朝の后

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

源俊朝の后

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

あせとやと女のしをれあみひりたはなれ

源仲賢の后

かゝる中か人の親と方々にたつその枯れけり
前を返す長政のけり女と申お忠宗朝長は將監四
女といふかゝるいゆるに忠宗朝長といひけり
ち程のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

源朝圓朝長

二方きよ、まはてあひくわいあくあくあくあくあくあく
飛人親滝さうち新と又の目つらうさくさく

藤原公教

雲のさかたれあつ物とあつあつあつあつあつあつあつ
城は院の時深後重りさくさくさくさくさくさくさくさく

中絶言重資で及弁さくゆけりさくさくさくさく

源俊賴朝長

日此えあまきよいをさくさくさくさくさくさくさく
二道は養いさくさくさくさくさくさくさくさく
かゝるさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

周防内侍

ちあつさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

金葉和歌集卷第十

雜下

ふ實つるれゆくむらかの家ふさるるに梅
ふとれゆりむさふとて枝よじりゆり

藤原基俊

昔やあつらふ梅えの花ふ秋りゆりせよ

や
中絶言實行

移ふる花のすこし移く木のはげしき
人くあまふして花ありえるるむら風
むらりてうらふ人のむらりなふ事こそ

さゆりゆきむらりゆり

平基總

桜ゆきゆき風をゆりて花のむらりゆり
後三條院にむらりゆりゆり
うしゆは高湯ゆせゆりゆり
ゆりゆりゆり

藤原有作和歌

あやみ草神をのこむ世中にむらりゆり
あやみせゆりてむらり寺ふらりてゆり
ゆりゆり

六條右大臣

新波ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

郁芳の涙のほろろとけしゆく又の道は好知信の

うつろいけり 康資主母

うろろに枯らつてぬとさけいどさうも虫の祥んあり

下鶴よさえら道てあけさゆけり此より

源俊賴朝臣

世にあらぬ涙のほろろとけしゆく又の道は好知信の

律師實源りもとに女房は信信衣をひとていん

せゆけ道はゆるめて足されおももかみ守字所

きしとて女をわらわさくいと此信信衣にてさらけ

ぬすこれあうらりの女房ていづこぬいんとまた

忍めてとこはさうさうさらされは信信とてさ

てうろろとて女もいとわらわのそこれらりよう記て

道平よりきりて 讀人より次

世にあらぬ涙のほろろとけしゆく又の道は好知信の

はほらよまひすそゆかりとてさうさうさらけ

ゆりてり

母にあらぬ涙のほろろとけしゆく又の道は好知信の

女房守書總よとてゆかりとてさうさうさらけ

ゆかりとてさうさうさらけを女主人よあり

藤原知信母

よちり

権信正永縁

夢小のこむしれんあひなまことしつねえつらむら
 今つじふあのみまもれまらむらむらむらむらむら
 きふしむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 病りあはきむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 小式部内約うせむらと東門院よりうはむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 とかあつむらむらむらむらむらむらむらむらむら

智水式部

りの吾よあはしむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

平忠盛朝臣

むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 陽明院のむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

有原資信

むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 白河院の女侍がむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

傳正初言

草木もなきはかりともみゆかき松之存れはあまえんか
る原の信重服よちりてふそののてゆるき方に
弁うをくしりてさういさるきうはさくせう
定れはあかり 楊文仙

初言はかりの言葉もきぬおりに今もこれき
範圍約信ふらして伴子園小海らさるをいひ
正月の二日月をいふあもあはしりゆるき
是のあましりもえせそとこれきれはらり
いかりけしとかがてそとくさるあましり守徳

園とちりて一まかすいせくは徳と戸れ
とさういりてさる 徳園法師

天川のうら水よき流をせあまそらに次神あり神
神感ありて大雨ちりて三日に敷とあまらり
あろ集よみこり

心徳信書してさうれはあまそらよよませゆるかに
松政左大臣

多も書しはかりとさういはあまそらに
法文のありきりてあまそら女系のをとら
かすすもあまそらとさういせうい

くまにひきつらるるをれいもてよませ給ふ

三宮

かき^{えい}に秋^{あき}さらしとえしつら^{つら}か^かの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

月のあつらひもるる秋^{あき}西上人のま^まの^のま^まの^のま^ま

うら^{うら} 信^{しん}正^{せい}の^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

實^{じつ}軌^ぎ上人^{じゆん}の^のま^まの^のま^まの^のま^ま

静^{せい}嚴^{げん}寺^じ

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

送^{そう}子^し田^{でん}親^{しん}王^{わう}

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

依^い釋^{しやく}迦^か道^{だう}教^{きやう}念^{ねん}地^ぢと^とい^いぬ^ぬの^のま^ま

皇^{かう}后^{こう}交^{かう}配^{はい}後^ご

い^いの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

清海上人後生なびとそれおしして移りたり
その掬るん小僧のそらてふらんけりてい

かけりてい風の吹とみくらりれいおきよ
普賢の十願の文に願我條欲命終時といふ

と云ふなり 光樹法師

余とも罪を毛病またふりきよはるもや来んん
衆衆必霜病といふる文といふなり

定誉法師

罪の衆衆ものう次浦ぬんぬに集すうぬぬぬぬぬ
弟子品れうなりといふなり

信正靜園

吹ふと物もれ山風ならせ衣のうれ玉と又もや
掬安ふれををうなり

膳西上人

清らふあふふ新母よいしてて屋のう毒とらりれ
皇后文極大文師付

そのよをうらりれきよひふて月と音のうらりれ
龍女成佛といふ 勝超法師

口の海を産のそらりてり物といふてその月と
涌出ふりてりをうなり

醍醐の橋舎よものちるをきよなる

珠海法師

空を移りてせまき清きあらしの流花をばけいひき
極樂とばよといふ方こそ清きなる

源師後頼朝

も海は浪はたふさぐいとせまきあらしの流花をばけいひき
地獄は舟はしづかしのえんじいふ素つらぬきなる

和泉式部

あさきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき
くものしほきろふ儼よそえりやせむじら

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき
あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき
あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

源後頼朝

あかきやしろき枝のたむじまの流花をばけいひき

いづかも川とたここれ袴をぬきて手にいさ
てわらふとて 頼徳の臣

笑哉川とほりてぬきくもわらふとて
信徳

かりとる海を毛行しとあひして
あやふく

なみちゆりともあゆこいゆらん
暹原の妹

うぬはらりまし物をおひつら
智形が笑哉よとららるるふららつとあは

くされてかんとまねらるるをそく

神志形

らあふる神とはあふましくこのの

和泉式部

これとそともの肩よりとはらふ

源頼光の従馬者いづくありをり時よりあま

そと川といふ海河のけりかんとあはれらるるを

あふらるるまふひくことせまればあはれ

つとまらるるけりといふ海とまらるるすまひよ

なり
源頼光朝臣

そそぐ糸舟のすくはなるを

相替母

物もこれからり志ともしきこゆか

読人不知

はみく事はちつとよしそるらうな

お本政大臣歌中して

風のよにしくうてはなるを

すんじふとひくもれあやるを

あまをみく 久人あつ次

ひくまはよんたすまじ草なる

うぶのりいんくぬくつる花を

らを斬すらくらしきぬの

と見て

あまはきりもあつらふ

かたきあつらふを

人のひれ梅花のさだらえ

律師慶暹

じちあをうさきいふ

まかろつとれはき

雨ら風やあやならん

此乃とて此より海より伝へて

漢人より伝

ふ海とてと海より傳へし

今も傳へしりてわくとは傳へて

物乃あふふう海よりとて

新算法師

わく海とてれとくあきなる物

く人より伝

あまははす人のえたより物とてあふ

はしりてとてく 成光

わくなるものわくよりとてはい海

新羅法師

又のせいらあをたとは海とてく

七十にちりてつうとてたててよりとてあふ

しとてとてあひつとていよあふ

海後新法師

七年のりあつ塩より海からいよとてせあを

しとてあふ

兼安七五月九日自書寫畢授了日授或奉心後授
自筆之奉重授了日年六月十二日坂河院百首
哥授合了
本二所授サニ本集付件ホウ祝文ハク別紙書入了
安元二年八月廿二日自筆寫了了奉
皇右文亮カミ也

少納言顯一淨判

此集每三本取和皆心忘涼とら為和紙本一授了
禮立大述新千載集 陽卷作者書寫了 西方行者頓阿

永享九曆仲夏書寫之奉シメテ
文安五年孟春下旬之書寫了

授了云
伴大外礼師家胡良以冷泉家燈奉書寫同
合授合早

系議藤原海純

借清大奥書年 永正七年書法於病床
之書寫記

柔門祐什

件奉不審事亦立之仍申請行圖
御本同四月上旬之此令授合果

寺口親王
邦高

永正八年八月八日依那禱而望不願
惡筆凌病患終書寫之切記

沙門祐什

何謂大且... 年... 以... 命...

集門... 附...

... 仁... 附... 集門... 附...



